お茶の水女子大学リベラルアーツとＦＤ公開シンポジウム

平成 21 年 2 月 12 日（木）

コメンテーター 川島 啓二

（国立教育政策研究所 高等教育研究部 総括研究官）

皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました川島です。お疲れのところだと思いますが、コメンテーターとしての仕事をさせていただきますので、10 分ぐらいお付き合いいただければと思います。

自分の所属している組織とか、その仕事の話は端折ることにいたします。今日は本当に充実したご発表を聞かせていただきました。こういうシンポに私もよく出席させてもらい、眠くなることも多いのですが、今日はコメントしなければいけないというプレッシャーもありましたが、全くまんじりともせず、最後まで聞かせていただきました。

こういう教育分野で高度化していく教育のコンテンツとプログラムというのを開発していく例というのは、私の知る限りでは、こちらのお茶大と東大、慶應、東北大学というあたりが今、多分先進的に走っている大学だと思います。今日はＦＤシンポジウムという名前も付いているのですが、ＦＤという言葉が日本の大学で使われてもう 15 年、もう少したちますかね、それが西高東低だとわれわれの業界では言っていて、西の方の大学の方が進んでいるということだったのですが、それは主にインストラクショナルスキルといいますか、先生の教え方に特化した話でのことであって、こういうコンテンツについて、いずれ取り組む大学が出てくるだろうと思っていましたが、今日のお話にあったような東の方の大学、しかも非常にアカデミックなレベルの高い大学で、こういう取り組みが進んでいるということに、今、私としては注目させていただきたいと思っております。それが今の日本の大きな状況、大づかみに言って、そういう状況なのかなと思っています。当然、強く期待したいと思います。

コメントということなので、それらしい、もっともらしいことを一生懸命考えていたのですが、「21 世紀型文理融合リベラルアーツ」という題目で、ここでキーワードが三つあると思うのですが、21 世紀型ということと、文理融合ということと、リベラルアーツ、特にリベラルということなのでしょうが、リベラルとは一体何だろうと考えながら、ずっと学生さんと先生方の報告を聞かせていただきました。

一般的に、教科書的な説明をさせていただくならば、リベラルというのは中世の大学以来、専門教育なり、あるいは職業教育から自由であると。自由学芸という翻訳が当てられることが多いと思うのですが、そういうところから自由であるということの意味が今までの理解だったのだろうと思います。ですから、一昔前の大学であれば、それはいわゆる専門に偏りすぎない。日本の大学の人材養成の目的は、教養ある専門人の養成ということになっておりまして、こちらのコメントを引き受けさせていただくときに、夏に寺崎昌男先生が来られて講演なさったと思うのですが、それをホームページで読ませていただきまして、寺崎先生は立教大学の方で、教養ある専門人ではなくて、専門ある教養人を育てるというコンセプトでカリキュラムの改革をなさったのだというお話がありましたが、教養ある専門人、つまり専門性に偏りすぎない教養人をつくるというのが、かつてのリベラルアーツの一つのとらえ方だったのだろうと思うわけです。

では、それと同じつながりで、今日のいろいろなお話だとか、これから大学が向き合っていかなくてはいけない現実を考えていったらいいのかというと、それは多分そうではなくて、最初の 21 世紀型というところにかかわってくる話だと思うのですが、そのことについて私が非常に興味を持ちましたのは、パンフレットを頂いて、そこで、この教育プログラムの教育目的と教育方向について書かれておりました。教育目的については、見る、聞く、話す、書く、これは普通言われるのですが、もう一つ、次に「作る」という言葉が入っていまして、これに私は新鮮な驚きを感じました。つまり、知を作っていくということを非常に意識されたプログラムなのだなと。その方法については、実習、体験などの新しい、今のはやり言葉で言うとアクティブラーニングのような手法を取り入れてやっていくのだということだったのですが、知を作るということを目的に意識されているというところが興味を引きました。

と申しますのも、恐らくこれからの若い人たちが向き合っていかなくてはいけない社会というのは、何か体系化された知識というのをきちんと理解して、それを応用していったらいいという社会ではなくて、非常にドラスティックに変化していくわけですから、常に新しい知を生産していくという局面が求められてくるようになってくるのだろうと思うのです。そのときに、やはり自分の問題関心なり、発想の枠組みなりというものを転換していく、チェンジしていく。別にオバマにあやかるわけではないのですが、転換していくような能力というのが実は求められてきているのではないかと。

だからリベラルというのは、そういう意味で受け止めるべきではないのかと。つまり、自分が今まで乗っかってきた問題意識なり、発想を、どこかで切り替えることができるような経験なり、あるいはそのための基礎的な力というのを養うことが実は求められている。そういうプ

Copyright 2008 Ochanomizu University, All Rights Reserved.

ログラムというのを、実は大学の方でも用意してやる必要があるのではないかというような考え方で、いろいろな取り組みというのは行われてきているのだろうと思うのです。つまり、それは方法としては気付きなどということがあるのでしょうが、そこの方法のところで新しい体験みたいなものが取り入れられてきているということになるのかなと思います。

だから、今日も体験なり、実習なりという言葉がいろいろ多かったわけですが、それは実は、今まで大学で、大学の先生たちが非常に慣れ親しんできた体系的な知というものと、それから学生の方が恐らくこれから必要とされるような学びの在り方というのは、必ずしもぴったり一致しない。その一致しないものをどうやってつないでいくのかという、その媒介項みたいなものが、今日のお茶の水女子大学で努力されているプログラムというものの今後なのかなと思った次第です。そういう意味では大いに期待したいと思います。

それから先ほど、ちょっと言い忘れたのですが、知を作るということに当たって、例えば文部科学省などは、これからは知識基盤社会なのだからというような言い方で、それを説明するのです。中央教育審議会の答申などでも、その言葉が使われるのです。でも、枕詞のように使われる言葉でありながら、実はあまり深く分析されていないといいますか、私もちょっと調べてみましたが、ＯＥＣＤ関係から、そういう言葉が出てきたわけですが、書かれている本は、そういう説明を除いてはあまりないのです。だから、具体的にどういう教育プログラムでそれをやったらいいのかということは、実は大学任せになっている。教科書的には、今まではストックとしての知識というのが問題だったわけだけれども、これからは知識をどのように活用していくかということが重要になってくる社会なのだと。だからこそ学士力という言葉が、学生の皆さんはまだご存じないかもしれませんが、そういう学士力を養っていくのが、これからの大学の学部教育の一つの目標だなどという言い方がされたりもするわけです。そういう提案というのは、全部そういう文脈の中で理解されることなのだろうと思います。

ですから、申し上げたいことは、新しい社会と知の在り方というものについて語られながら、実は具体的なことが、国レベルでは、あまり具体的ではないというところがありますので、今日は私も非常に感銘を受けたということです。

最後に体験ということを言いましたが、体験を強化していくというのは、実は結構、これも言葉で言うのは簡単です。既存のディシプリンの体系知というものと、学生がこれから必要になってくる学びの在り方というものをどうやって結んでいくのか。これも言葉で言うのは簡単ですが、いろいろな大学の実践というか、試みの中から、日本がこれから本当に必要としているものを獲得できればいいなと思っています。

以上が私の考えたことでして、今日は本当にお礼を申し上げて、私のコメントに代えさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

お茶の水女子大学
Ochanomizu University

Copyright 2008 Ochanomizu University, All Rights Reserved.